『パリ日本文化会館図書館ニュースレター』2004年特別号、pp.1-2.

ISSN 1291-2441

パリ日本文化会館
図書館ニュースレター
特別号（2004）

La Lettre de la Bibliothèque
Supplément (2004)
Maison de la culture du Japon à Paris

百年前の留学生たち

―『パンテオン会雑誌』公刊に寄せて―

今橋　映子　―　東京大学大学院助教授

本年（2004年）夏、パリ日本文化会館図書館に蔵される『パンテオン会雑誌』（1－3号、各1冊、1901－1903年発行）という資料が公刊される。これは手書きで記された回覧雑誌であり、今回全てのテクストの翻刻と影印に、解題、論文、資料が加えられ、閲覧用CD－ROMまで付された。まさに完全版と言って良いであろう（『1900年パリ・日本人留学生たちの交遊』ブリュッケ、2004年）。

これによって私たちは、知っているようで知らなかった、百年前パリでの日本人留学生たちのサークルやその絵画・文学活動、あるいは交遊の実態に、ぐっと近づくことができるようになった。

そもそも「パンテオン会」とは何だろう？それは1900年11月パリで結成された日本人サークルのことである。1900年パリ万国博覧会を機に、多数パリに集まった留学生たちの中で親睦団体を作ろうということになった。提案者は黒田清輝（洋画家）と寺島誠一郎（法学者）。その後参加者は優に60名近くまでなる。パンテオン会会員の顔ぶれの特徴は第一に、近代日本の代表的画家が多く含まれる（和田英作、浅井忠、岡田三郎助、竹内棲鳳、中村不折、久保田米斎etc）ということ。第二にそのメンバーは決して画家に限られることなく、当時のエリート留学生たち（その学問範囲は法学、教育学、仏語学、建築学、国文学、西洋史学、医学etc）や陸海軍関係者、さらには土井晩翠などの詩人まで含まれるような、幅広いものであったということである。パンテオン会はその意味で、一種紳士クラブ的な側面がある一方で、会員同士で面白い仇名を付け合って喜んだり、互いの弱点（愛妻家、恋多き男など）をからかう文章を書くなど、友好クラブの性質も十分に備えていた。

彼らの多くが下宿としていたHôtel Soufflot (9, rue Toullier) がパンテオン廟の近くにあったので、この会の名称が付けられたのであろう。パンテオン会は、会員が手作りで雑誌を作成したが、その1号－3号までがそのままHôtel Soufflotに残された。この下宿の経営者Sitter　夫妻の息子André氏によって大切に保存され、約17年ほど前にようやく日本側関係者に託されたのであった。数奇な運命により再発見されたこの資料について、2001年から共同研究チームが日本で発足し、百年ぶりの刊行に向けて多大な努力が費やされてきたのである。

『パンテオン会雑誌』の意義は、主に三つの側面から捉えられる。

第一には、従来明治美術史で記述されてきたような画壇内の対立（明治美術会VS白馬会）が、実際のパンテオン会内の人間関係から見れば、それほど感じられないこと。つまり画壇の政治と実際の交友関係とは、異なる面もあったのではないか、と推測さ

れる。またこの雑誌では、和田、浅井、久保田などの画家たちによって、〈装飾デザイン〉という領域への取り組みが見られることも重要である。

第二には、この雑誌に、江戸から明治へと橋を架けるような、様々な文学ジャンルの作品が見られること。俳諧、漢詩、古典的文体を模した戯文、歌謡、尻取遊び、戯曲、エッセイ、演説風文章など、実に多様であり、さらには日本人によるフランス語抒情詩やエッセイまで存在している。パンテオン会の会員は俳句の会を度々催しており、画家であっても古典文学に通じた人が多いことにも驚かされる。

第三の特徴としては、1900年前後に日本留学したフランス人歴史家 Georges Weulersse の日本論（"France et Japon" dans *Bulletin de l'Alliance Française* n°83, 15 janv. 1901, pp.1-15）が貼り込まれていたり、日本が当時占領していた台湾の教育事情についての論文（作者　源浩についての詳細不詳）が入っていたりする事実――つまり世紀転換期の、日本、フランス両植民地帝国の様相も浮かび上がるということである。この雑誌の公刊は今後、日仏関係の様々な領域への新しい光をもたらすに違いないと、私たちは信じている。

作家　藤野千夜氏に聴く

2003年11月29日から12月1日までパリ東に隣接するモントルイユ市で「第19回ジュニア向けブック・フェア」が開催された。今回の招待国は日本で、若者の間で人気の高い辻仁成氏と藤野千夜氏が招待された。図書館はこの機会に藤野氏に幾つかの質問に答えてもらった。彼女のプロフィールと回答を紹介しよう。

1962年生まれの藤野千夜は、『午後の時間割』(1995)で海燕新人文学賞、『おしゃべり怪談』(1998)で野間文芸新人賞、『夏の約束』(2000)で芥川賞を受賞した。2000年に『東京小説』という短編小説集が出版された際、フランスでも同時にオートルマン社からコリーヌ・カンタン訳で *Tokyo électrique* が出版され、この本所収の「主婦と交番」(Une ménagère au poste de police) は評判になった。藤野は男性に生まれながら、女性の人生を歩もうと決心した作家で、時に奇妙だったりナンセンスだったりするところがシンプルな文体とマッチし、若者の共感を呼んだ。今回のブック・フェアでは、チェリーマニュ社から最近出版された『ルート225』が話題になった。この本は「14才から読める」と但し書がついているほどで、藤野の若い読者への思い入れが感じられる。

図書館では、1886年にマルセル・プルーストが人格を読みとるために作った自己紹介質問表から31の質問を選び、藤野氏にしたところ、下記10に対して回答があった。

1. 自分の性格の主たる特徴は？　優柔不断。
2. 自分の最大の欠点は？　優柔不断。
3. 何を幸せと考えますか？　特に何も起こらないこと。
4. 何が自分にとって最大の不幸になりますか？　朝、セールスの電話に起こされること。
5. 一番好きな色は？　サーモンピンク（因みにプルーストの答えは、「美は色でなく、色彩のハーモニー」）。
6. 一番好きな花は？　朝顔。
7. 一番好きな小説の女主人公は？　ホリー・ゴライトリー（トルーマン・カポーティの『ティファニーで朝を』のヒロイン）。
8. 一番好きな画家は？　アンディー・ウォーホール。
9. 現在の精神状態は？ どこに行っても外国といった気分。
10. どんな過ちに対して一番寛容になれますか？　本人が反省している過ち。

皆さんはどう思いますか？

蔵書数

	図書	雑誌	新聞
フランス語	9262	37	3
英語		63	2
日本語	12506	67	4

視聴覚資料

ビデオ	1283
音楽ＣＤ	516
CD/DVD-ROM	183

入館者数（年間）

図書館	視聴覚室（内数）
18253	4512

レファレンス（年間）

利用案内	資料調査
1738	1819

貸出（年間）

登録者数	貸出冊数
230	2374

(2004年3月現在)

開館時間
火曜日から土曜日　13:00 ~ 18:00
毎週木曜日　20:00まで
閉館　日・月・祝日・夏季・年末年始

パリ日本文化会館図書館
Maison de la culture du Japon à Paris / Bibliothèque
101 bis, quai Branly 75740 Paris cedex 15
Tel : 01.44.37.95.50 Fax : 01.44.37.95.58
internet : http://www.mcjp.asso.fr
発行人　磯村尚徳　編集　森村悦子／李和雄／Florence Paschal／Pascale Takahashi／Racha Abazied／Christophe Sabouret
印刷: Editions Ilyfunet - Paris